

京都では、1200年前に平安京が成立すると、すべての主要な道が平安京に通ずることになり、街道を通じて、京都で培われた文化が各地へ伝わった。

これらの街道の京都の出入口は、京の七口と呼ばれ、時代によって変わるが、現在も栗田^{あわたぐち}口、荒神^{こうじんぐち}口、鞍馬^{くらまぐち}口など地名として残り、人々の生活と強く結びついている。そして、これらの京都の出入口から各地に通ずる京都の街道には、鞍馬街道、若狭街道、伏見街道、山陰街道、愛宕街道、鳥羽街道などがありそれぞれに街道町や集落などが形成されている。

この項では、京都に通ずる主要な街道を例として、そこに形成されている歴史的風致を示していく。

ア 鞍馬街道



図2-68 鞍馬街道

京都と丹波を結ぶ鞍馬街道は、物流の道として、また鞍馬寺・貴船神社への参詣道として平安期から利用された。この街道には、貴船へ向かう貴船道との分岐があり、さらに北へ進むと鞍馬寺の門前町へ至る。

(7) 鞍馬

鞍馬街道の要衝地である鞍馬は、鞍馬川に沿った山間の谷口集落である。平安遷都後、京都北方守護の寺院である鞍馬寺が創建されてからは、門前町として発展し、近世は、丹波からの炭の集荷、

中継地としても栄えた。

a 寺社と門前町

鞍馬寺は、8世紀に創建されたと伝えられている。牛若丸（源義経）が修行をした地として知られ、木造毘沙門天立像などの、国宝や重要文化財に指定された仏像や文書等が残されている。鞍馬寺の境内にある由岐神社の歴史も古く、天慶3年（940）にこの地に鎮座したと伝えられ、豊臣秀頼により再建された拝殿は、桃山文化の建築として重要文化財に指定されている。

鞍馬の町並みを街道から見ると、周囲の山々が屋根越しに見えて、山が町並みの背景となり、合間に鞍馬川や川の向こうに広がる畑地がみえかくれするなど、自然環境と一体化した町並みを形成していることが分かる。その町並みを構成する民家は、町家風民家が中心である。街道の両側に建ち並び、連続性のある町並みを生み出しており、中でも瀧澤家住宅は、伝統的様式をよく残しており、国の重要文化財に指定されている。

街道に軒を連ねる歴史的な民家では、江戸初期に成立した「^{ようしゅうふし}雍州府志」にも記載が見られる、鞍馬の特産品の「木の芽煮」などが販売され、独特の香りが漂い、鞍馬寺の門前町としての風情をかもし出している。

また街道沿い^{みこし}には、由岐神社のお旅所がある。祭礼のときに神輿が渡御するところであるが、日常は小広場として子供の遊び場にも使われており、住民にとってなじみ深いところである。また、これら以外にも祠や地蔵堂が、町並みにとけこむようにしていくつか点在している。

鞍馬川は、生活用水や非常の際の防火用水などに利用され、川面におりる石段、川沿いに開



写真2-117 鞍馬の町並みと自然